

教員名	阿部圭司（あべけいじ）	所属学科	経営学科
【ゼミでは何を学ぶのか】 ゼミではコーポレート・ファイナンス（企業財務）を中心に、会計学、証券投資論などの分野を学びます。資本調達と投資プロジェクトの評価、利益配分、資金管理、企業価値評価等、企業の財務活動（資金の流れ）に関わる分野で、経営学、会計学、金融・証券論、法学等、様々な分野にまたがる企業活動にとって重要なテーマといえます。 また、進級論文、学外の大会に向けての論文、卒業論文を作成する過程で、問題発見・解決力、コミュニケーション力、グループワーク等、社会人として求められるスキルを鍛えることを目的とします。			
【どのように学ぶのか】 基本的には「輪読」といい、ゼミ生が1冊の本を順に読んでその中身を要約、論点をまとめた「レジュメ」を配布して説明、内容について議論しながら理解を深めます。 輪読の利点は難しい本でも皆で読むことで理解が深まる点にあります。メンバーの助けを借りて理解を深めたり、逆に自身が先生役になることで、さらに学びを深める効果が期待できます。 また、輪読時には内容と関連のある新聞記事も報告してもらうことにしています。本で学んだ事柄が社会ではどのように扱われているのかを知ることで、生きた経済・経営を学んでいる意識を高める、記事を通じて企業とその事業内容を知るといった効果を期待しています。 輪読とは別にグループ、個人と形態はさまざまですが、2年生、3年生には学外で開催される大会での論文発表、4年生には卒業論文の作成を課しています。プレゼンテーション、データ処理など必要なコンピュータのスキルについてはゼミで講義を行います。 この他、工場見学、日本銀行や東京証券取引所への見学、ゼミ合宿などの活動があります。ゼミ合宿ではビジネスゲーム、論文の発表などの勉強と、ゼミ生同士の懇親を深めることを目的としています。			
【学んだことはどのように生かせるのか】 ゼミで学ぶ内容に関連して、卒業後は金融機関に就職する学生が他よりも多めですが、他はあまり変わりません。メーカーやサービス業に進む学生も、公務員になる学生もいます。他の経営学科の専門領域と同じく、企業財務はどの業種でも大切ですので、どんな会社・組織でも役に立つことでしょう。 また、金融・証券に関する勉強もしていますので、自身のプライベートな資産形成や運用についても参考になると思います。			
【おすすめの入門書・基本テキスト】 山根一眞、『「メタルカラー」の時代』，小学館，1993年			

ホワイトカラーでもなく、ブルーカラーでもない、高度な技術者・専門家たちを「メタルカラー」と呼び、インタビューした週刊誌連載記事を書籍化したものです。鉄鋼や自動車、半導体、土木、機械、化学などの様々な技術者の新技術、新製品開発時の工夫、苦労、喜びがまとめられています。日本ってすごいなあ、と感心すると同時に、こうした技術力のある企業を経営の面から支えることのできる人材を僕らは育てないと、と感じずにはいられません。中身は少し古くなっていますが、まだまだ読み応えはあります。文庫化（全15巻）されているので読みやすいかと思います。

井上達彦、『模倣の経営学』，日経BP社，2012年

この本にも書かれていますが、「学ぶ」とは「真似る」を語源にしています。子供がお母さんの発音を真似て言葉を学習するように、真似るというのは学ぶ上で大切なプロセスです。企業もまた同じ。模倣から始めて、やがてオリジナルを超えるまでに成長した有名企業の事例がたくさん紹介されています。大学生もまた同じ。先輩や先生の模倣（模倣される価値のある先生にならないといけませんね）から始めて、やがて立派な人材に成長して欲しいと願って推薦します。そうそう、不正コピーはもちろんいけませんよ。

阿部圭司・小澤伸雄、『新版ファイナンシャル・リテラシー』，同友館，2015年

「よ〜く考えよ〜，お金は大事だよ〜」という歌とアヒルで評判となった某生命保険会社のCMがありました。お金は大事です。でも日本人はお金の話をすることを嫌がる傾向にあるようです。アリとキリギリスで例えると日本人はアリタイプが多いように思えますが、意外とキリギリスタイプの人もいます。アリタイプでもお金の事についてはまったく分からない、という人もいます。経済学部生だけでなく、すべての人に向けて、人生で大切なものの1つであるお金について、真剣に考えよう、そのための考え方や知識を学ぼう、という本となっています。この手の本はいくつか出ていますが、自分たちの書いた本を挙げてみました。ええ、これは宣伝です。

【まだ見ぬ君へのメッセージ】

知っているよ、という人も多いと思いますが、Cool heads but warm hearts --- これはケインズの師としても有名な経済学者アルフレッド・マーシャルによる、これもまた有名な言葉です。経済学のみならず、多くの社会科学を志す者が心に刻むべき言葉として知られています。

様々な事柄に取り組むには冷静な分析力、判断力が必要ですが、それ以上に求められるのは思いやりの心、暖かい心である、という意味です。

きっと君たちは、経済や経営を勉強して、この知識を活かして社会や地域、人々の暮らしを良くしたい、という熱い気持ちを持って入学してくるのだと思います。その気持ちを大切に、その気持ちを大学での勉強にぶつけてください。君たちが経済学・経営学というクールで鋭いツールを使いこなして、社会で活躍するためのお手伝いをしたいと考えています。